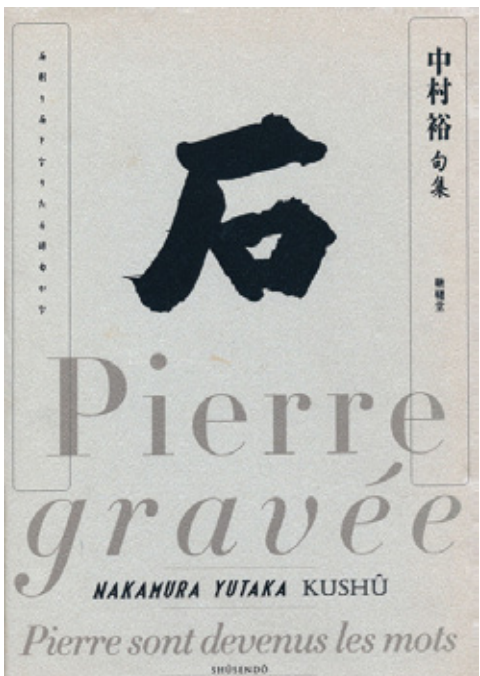


# 中村裕句集「石」を読む



## 句集誕生までの十年

ナムーラミチヨ

もちろん、いつかは必ずと思いつつながらの十年である。中村裕の句集、私の頭の中では実はわりあい早くから形をとり始めていた。好きでいつでもそらんじることのできる句は百句を越える。

光年の旅にしあれば春の水  
発砲スチロールすつ飛んでゆく静けさよ  
青空やシート隠れのビル消失  
実物大のティラノザウルス夏の空  
万緑や強くこすれば垢の肌  
直走るコンテナ列車夏の果  
籠ごめのニッポニヤニッポンゆく海原  
少年は蜻蛉に乗りてゆく他郷  
ソファ深く眠れる人や冬銀河  
飛行機で着陸したるまぐろかな

ぴたつと焦点のあった俳句を前にすると、いつも思う。しかもそれが大画面の構図とテーマでありありと立ち現れてくるとき、俳句は読者を選ばない。そういう開かれた作品は、俳句という表現形式に改めて魅力を与えてゆく。

中村裕が本人の言い方で「俳句との肉体関係」という、そういう状態を自認し始めた頃、傍らから見ていて彼の姿は眩しかった。それは三橋敏雄監修「壺母」七、八、九号の毎号五十句を三回連続エントリーに挑戦していた頃である。

ベランダに海豚くる日のための音楽

出来たてホヤホヤのこの句を見せてもらったとき、私はひっくり返って喜んだ。息子も喜んだ。本人は、ほんと！？ヤー、テレチャウナー、とはじめは半信半疑。でも私も息子もあんまり喜ぶので、だんだんのっけてついに三人ともイルカの親子のようになって、ベランダから海の見える、しかもイルカも見えるわが家の板の間で、ペタペタと笑いこぼしてしまった。

果たして、三橋先生はというと、先生も喜んだ。孝子夫人も喜んで、色紙に書いて持つてこいと言う。その後しばらくの間、高屋窓秋の端正な色紙に替えられてしまうまで、先生宅の玄関ホールに掛けられたこの句は、「壺母」のための五十句以上の俳句が揃う度に持参する彼自身を、その度に励ました。この頃、私もよくお邪魔した。先生のチェックは厳しい。合格、準合格、不合格、また一考を要する箇所にも印が入る。それを持ち帰り推敲を重ねてゆく。その行程をつぶさに見ることで私も貴重なものを学んだ。わけても、自作俳句をなおせる彼の力、それはもちろん、創造力といっ

てもいいのだけれど、むしろ、俳句という形式の側から常に投げかけてくれるエナジーに感応する力、そういうものが肉体から沸き始めていること、そしてそれを喜んでくれる師との出会い、それは美しかった。

三橋先生は、これは本当に冗談なんだけれど、自らを「俳句オタク」と言ってしまうくらいの俳人だ。いい俳句、面白い俳句があるとゴキゲンになるし、だいいち話の内容のレベルがぐんと上がる。

「わりあい、僕好みの句が多いんだよ、裕さんの……」と言っていただけの人にくっついていって私はずいぶん得をした。今も私がアーティストであることに希望を持ちつづけて可能性を疑わずにいられるのは、それらすべて、この頃に擲んだ物から派生している。

「僕とミチヨさんは、作品の前で根っこが同じなんだよ」。その晩は、なんだか俳壇というものに無性に苛立ってしまったてなまいきに文句を並べてるとき、先生にそう言われて、自分もずっと作品の前から離れないで、生きてゆこうと思った。

さて、句集『石』、中村裕本人が最も待ち望んだはずの第一句集である。

パラパラと頁を繰ると、ああ、この句はあのときの、それからあの句はこんなふうにして……、と取りとめのない回想に終始してしまいそうになるが、しかしこれはまた、一冊の本を作るためにその作品の配列や入念な「後記」も含め、構成に費やす時

間と労力を惜しまなかった彼の「仕事」を見せてくれるものでもあるのだ。

題字「石」を三橋先生にお願いしたのは素晴らしいアイデアだったと思う。羽良多平吉のデザイン、フランス語訳も加えて、とてもチャーミングな本に仕上がった。ただ、残念なのは、本文頁俳句の活字にもう、1.2倍の大きさ、強さが欲しかった。私も敬愛する平吉ではあるが、裕俳句へのまなざしに少々異なるものがあるのだろう。しかしこの、彼独特のデザイン世界とコラボレートできる中村裕の「俳句と仕事」とはどんなものなのか、その手がかりになりそうなものを探ってみようと思う。

最初の頁（〇〇三）である。

地球にそら砂の軋みをからだぢゆう  
綻びをまたも着て立つ春の朝

一句目は、もしも私が映画を撮るならこういうシーンから始めたい。予感に満ち溢れた大きな画面だ。「地球にそら」が時間設定を面白くさせていて、砂浜で（タイムカプセル）から目覚めた（宇宙人）自分がいる。地球人であつてもひとりの宇宙人であると自覚する瞬間があるのは素敵なことだ。砂漠に不時着したサン・テグジュペリのようにもあり、ファンタスティックだ。

二句目は、まだ冬着のままの、しかもその綻びがいかにもうれしい春の朝であるこ

とよ、といった光景。文体、内容からいってどうしたって、畳の上に素足で立っている大人の男が浮かんでしまう。

はじめの句が地球という星に生まれ棲む自分も含めた生命体へのあいさつだとしたら、二句目は俳句そのものへ、また俳人たちへのとくに白泉や三鬼へのオマージュともとれる。

この二句が裕俳句への玄関ドアであることの意味は深いとみてよさそうだ。かなり早い時期に、これとそっくりなカップル句があることを思い出した。代表句「ベランダに……」を作るよりも以前、まだ横浜に住んでいた頃「暮れてゆく化粧合板日本かな」を作っている。

この句の掲載頁（〇五六 〇五七）を開いてみると、

丸山真男死す八月十五日曇天  
暮れてゆく化粧合板日本かな  
身のほどを知らず日暮るる底かな  
はづかしく宙吊りの箱型住宅

この四句は互いに響き合いながら、非常に硬質なインパクトを与える構成になっている。「暮れてゆく」はへたをすると妙にペーソスに流れていってしまいそうになる

言葉だが、ここではぐっと踏み止まっている。この句には、当初より彼自身かなり手応えを感じていたと思う。誰にでも見える知ってる事実が俳句という濾過装置を通してすることで、ポエトリーに生まれ変わる。そのことをすでに早い時期から最もよく彼自身に教えてくれたこの句、その後やや遅れて圧倒的にポジティブな「ベランダに海豚くる日のための音楽」。

以後、この二句は、互いにバニシング・ポイントや物差しのような役割をはたしながら、裕俳句の空間を支えていたのではないだろうか。彼がめざしたことは、俳句表現に周到であつても陳腐な観念とは手を結ばない、また一方、閉鎖的な詩空間でのひとり遊びの危険も回避しなければならぬということ。そうでなければ、このように間口の広い、多様なまなざしを招き入れていながらも、なお満たされた空間が実現できるはずがない。しかし、これは簡単なことではない。句集の「後記」に「走錨」という話があり、興味深い。そういう状態から脱出するのに、作家にとって自己作品が励まし導いてくれる力は大きい。

その「後記」なのだが、中村裕に於ける現代俳句総括とも、またやや決意表明のようにもとれるこの読みものは、読者の心理からいくと、もう一度この「暮れてゆく」を含む四句の構成を堪能した後に読んだ方が気持ちよく理解できそうだ。この四句から伝わってくる作者の俳句に向かう姿勢は、「後記」で語られているものと同一であることは疑いようもない。

しかしそれは、最終頁（一〇二 一〇三）の構成が弱いという意味ではない。

馬車道といふ名の道に疲れ立つ

残照の空き地を丁寧によぎる

町消えて不思議な雲の浮かびたる

ビニールのはためく夜が始まりぬ

私にかぎらず、また何によらず、作品の始まりと終わりをきわめて重要視する向きは多い。この句集らしいいい終わらせ方をしているなど思う。読者に負担をかける断定的なモチーフはどこにもない。あるのは、疲労感、残余感、漠とした風景の中で、神経だけが丁寧に純化されているようだ。しかし、また何ごとか始めねばならない。

バタバタとはためくビニールの音に促されて。



俳句同人誌「春昼」4号  
1998年の掲載記事より